

# 明治期の読書意識

## －読書論の分析から－

目次 祥子

本研究は明治期の読書論を分析することによって、明治期の人々の読書に対する考え方を明らかにすることを目的とする。

明治期の読書や読者について歴史的な観点から研究したものは、文学における前田や歴史における永嶺重敏の研究など、すでにいくつか存在する。しかし、読書論をその分析対象とするものはほとんどない。読書論は主に、その著者の個人的な体験から読書の理想的なあり方を語るものであって、読書活動の実態を示すとは言えないためである。しかし、これは読書論が歴史研究の史料として意味がないということではない。読書論は読書に対する著者の意識を明確に示す。これは読書調査などの統計資料からは読み取ることが出来ないものである。読書論の変化を分析することによって、読書の理想像の変遷をたどることができると考えられる。大場博幸は、読書論で語られる読書法を研究することによって読書論を5つに分類し、その変遷を示している。

本研究では、読むべきとされた図書の種類、それによって期待された効果によって、明治期の読書論に次の5つのタイプがあることを区別して分析した。旧来的な図書を読むことを求める「保守的読書論」、学校などの社会において実際に役立つ知識を重要視する「実用的読書論」、広範な知識の獲得手段としての読書を語る「知識獲得的読書論」、読書によって人格の向上を目指す「修養的読書論」、読書による娯楽効果を語る「娯楽的読書論」である。分析対象とした明治期の読書論は、『近代「読書論」名著選集』（出口一雄監修、1994年）に収録されたものと、『現代読書論』（紀田順一郎・山下武編、1981年）第2巻「書物と生活」の付録「明治期の読書論」に掲載されたものを参考に、合計35点を収集した。

本研究の分析の結果、明治30年代を境として読書論には傾向に変化があることが指摘できた。明治30年代までの読書論は、知識の獲得など直接的効果が重要視される傾向にあったのに対して、明治30年代以降における読書論では修養や娯楽といった、内面の効果を重要視する傾向が生じていた。

本研究が採用した読書論の研究という方法では、読書に対する意識の変化を明らかにできたのは、読書論を執筆、翻訳、編集した学者などに限定されるという制約があり、民衆などの読書意識を研究する場合には別の方法を考える必要がある。さらに、明治期における読書論の著訳編者を理解する上で、読書論以外の、翻訳者たちの思想や活動なども考慮に入れるならば、さらに深い考察を導くこともできるであろう。今後の課題として指摘する。

(指導教員 原 淳之)